資料

児童を対象とした育児疑似体験プログラムの実施報告

Report of the Child Care Simulated Experience Program for Elementary School Children

松岡あやか[1)]・荒武　亜紀[1)]・清水　鈴代[2)]・伊久良美和子[2)]・野間口千香穂[1)]・兵頭　慶子[1)]

Ayaka Matsuoka・Aki Aratake・Suzuyo Shimizu・Miwako Ikura
Chikaho Nomaguchi・Keiko Hyodo

抄録

A大学における夏期限定学童保育（小学校１～６年生）において，１．赤ちゃんへの抵抗感が軽減すること，2. 赤ちゃんへの関わり方がイメージできることを学習目標に，赤ちゃんの《泣き》について知り，それに対する育児技術を経験できる育児疑似体験プログラムを企画・実施した。児童は，赤ちゃんの世話に対し「将来役に立つようにしたい」など肯定的な感情が高まる一方で，「赤ちゃんの重さ」を体験し，【おむつ交換】や【あやし方】の難しさを感じており，否定的な気持ちも高まっていた。しかし，児童期なりに赤ちゃんの特性を考えながら世話を経験し，赤ちゃんに関わることを前向きに捉えていた。《泣き》の理解と育児疑似体験は，児童期において，幼い他者と触れ合える素地を養う導入としての学習方法となることが示唆された。

キーワード：育児疑似体験，育児技術，対児感情，児童
the child care simulated experience，the skill of child care，
the affection for baby，school children

Ⅰ．はじめに

我が国では，1989（平成元）年の合計特殊出生率における1.57ショック以降，少子化問題は改善されていない。このような現状において，自分自身が親となるまで，新生児・乳児（以下，赤ちゃん）に接したことのない若者が男女ともに多く存在する。田中（2007）は，育児適応に大きく影響を与える要因として，「育児行動（授乳および離乳，おむつ交換，抱く，お風呂入れ，あやす）に関する苦痛」があり，育児行動に苦痛があるということは育児への負担感やストレスとなり，育児に対する肯定感情を妨げることにつながると述べている。赤ちゃんに接した経験がなく父親・母親となった際，育児を行っていくことに負担感やストレスを抱き，育児に対する肯定感情を下げる可能性が考えられる。

少子化社会における現状を受け，〔少子化対策大綱（2004年６月閣議決定）〕では，「生命の大切さ，家庭役割についての理解」が重点課題の１つとして導入され，〔子ども・子育て応援プラン（2005～2009年）〕では，新たな次世代育成を目指した視点として，「これから親となる人が皆，乳幼児の子どもとふれあう機会を持つことができるようにする」ことが目標とされた。その具体的施策として，「乳幼児と触れ合う機会の拡大」，「生命の大切さや家庭の役割などに関する学校教育の充実」などが，〔子ども・子育てビジョン（2010年１月閣議決定）〕において挙げられた。その後，〔新

１）宮崎大学医学部看護学科　小児・母性（助産専攻）看護学講座
School of Nursing, Faculty of Medicine, University of Miyazaki
２）宮崎大学清花アテナ男女共同参画推進室
Kiyohana Athena Gender equality Support Room, University of Miyazaki

たな少子化社会対策大綱（2015年３月閣議決定）〕に引き継がれている。これまで次世代育成施策として，船橋市健康福祉局子育て支援部地域子育て支援課・児童ホーム（2008）や呉市（片山ら，2003）などでは，「いのちの学習」，「ふれあい体験」を通して，育児の楽しさや大変さを経験し，子どもに対する親の愛情を再確認し，子育てができる心を育む取組みがされている。

著者が所属する小児・母性（助産専攻）看護学講座は，みやざきCOC推進機構平成27年度みやざき地域志向教育研究経費にて「子どもの生活と子育てにおける世代間交流の推進プロジェクト」に取り組んだ。そのなかで，子育ての体験として，幼少期から日常生活のなかで子どもを世話することを繰り返し経験していくことが親となり子育てをしていく準備へとつながっていることが示唆された（野間口ら，2016）。次世代を担う子ども達の親性の涵養のために，赤ちゃんに接する機会を作り，繰り返し経験できる環境が必要である。

今回，A大学男女共同参画推進室と協働し，教職員ならびに学生の子を対象にした夏期限定学童保育にて，次世代育成を意図した育児疑似体験プログラムを企画・運営したので報告する。

Ⅱ．方法

１．プログラム概要

１）夏期限定学童保育（以下，きっずサマースクール）について

きっずサマースクールは，A大学男女共同参画推進室が「子育て・介護を支援するための取組み」として，平成24年度より企画・運営されている。対象は，A大学教職員ならびに学生の子（小学校１～６年生）であり，例年，夏期休業中の約10日間（８：00～18：00）開催している。平成28年度は，８月17～30日（土・日を除く）の開催であった。

定員は各日20名であり，学童保育が必要な日や興味関心のあるプログラム学習開催日への申し込みにより，各日の参加者が決められる。内容は，学習，遊びや学内施設を利用したプログラム学習である。学習や遊び，児童の世話は，学童保育指導員と学生ボランティアが担当し，プログラム学習は，A大学男女共同参画推進室の依頼により，協力可能なA大学教員が担当している。

２）育児疑似体験プログラムについて

本プログラムは，きっずサマースクールにおけるプログラム学習として実施した。平成28年８月22日に実施し，A大学医学部総合教育研究棟６階の実習室にて行った。指導員は，A大学看護学科教員２名，A大学男女共同参画推進室室員１名，学童保育指導員１名，TA（Teaching Assistant）１名，学生ボランティア３名である（以下，指導

表１　プログラム「赤ちゃんてなぜ泣くの？」スケジュール

13:00～13:05　（5分）	プログラム説明，注意事項説明	バックグラウンド（BGM・赤ちゃんの映像）
13:05～13:15　（10分）	アンケート：参加者の背景および赤ちゃんへの気持ち	使用語句の説明（各グループ担当指導員２名による）
13:15～13:35　（20分）	赤ちゃんの「泣き」についての説明 育児技術の説明と演示	スライド資料，DVD（泣き声とその様子） 使用物品：新生児モデル人形
13:35～13:45　（10分）	休憩	水分補給・トイレ誘導
13:45～14:20　（35分）	育児疑似体験 「授乳（瓶哺乳）」，「オムツ交換」，「排気」， 「あやし方」，「更衣」	1～2年生：2グループ，3～6年生：2グループ（各4名編成） 使用物品：育児疑似体験モデル，新生児モデル人形，肌着， オムツ，おしりふき
14:20～14:35　（15分）	赤ちゃんのお世話のイメージ化： 自分がしたい赤ちゃんの世話	描写 使用物品：画用紙，紙用マッキー，色鉛筆，シール
14:35～14:40　（5分）	赤ちゃんの「泣き」と育児技術の振り返り	父親・母親と赤ちゃんだった頃の話をした経験とその内容 修了証書（がんばったで賞）の授与
14:40～14:45　（5分）	アンケート：赤ちゃんへの気持ち	使用語句の説明（各グループ担当指導員２名による）

※　参加児童からの評価のアンケートは、プログラム終了後、きっずサマースクール本会場にて実施した。

員とする)。本プログラムを表１に示す。内容および方法は以下の通りである。

⑴　テーマおよび学習目標

本プログラムは,「赤ちゃんてなぜ泣くの？」という題目で行った。１．赤ちゃんの《泣き》について知り，それに対する育児技術の経験にて赤ちゃんへの抵抗感が軽減すること，２．赤ちゃんへの関わり方がイメージできることを学習目標とした。

⑵　学習内容および方法

ａ．赤ちゃんの《泣き》と育児技術の説明

特に新生児では,《泣き》が他者へ欲求を伝達する方法である。乳児に対する母親のタッチの関連要因に《泣き》があり，育児の経験がない初産婦の特徴として,《泣き》場面の愛情タッチが少なくなる（麻生ら，2016)。そのため，赤ちゃんに接した経験がない児童では，泣いている赤ちゃんに触れる抵抗があると考えられ，赤ちゃんは泣く存在であることや空腹や不快（オムツが汚れている，ゲップがしたい，お腹の張りなど)，眠いなどの状態にある《泣き》についての内容を説明した。

赤ちゃんの《泣き》については，国内外において様々な研究がされている。そのなかで，空腹や不快（オムツが汚れている，ゲップが出そう，お腹が張っているなど)，眠いなどの状態にある《泣き》の内容であり，児童が理解しやすいと思われたPriscilla Dunstan（2006）によるDunstan Baby Language（DBL）の赤ちゃんの《泣き》５種類〈Neh（ネェー)；空腹〉,〈Heh（ヘェー)；不快〉,〈Eairh（エァー)；お腹の張り〉,〈Eh（エッ)；ゲップがしたい〉,〈Owh（オォー，アォー)；眠い〉の赤ちゃんの様子と泣き声を視聴した。赤ちゃんの《泣き》５種類の様子と泣き声で赤ちゃんが何を表現しているのか，またそれに対する世話が何か児童に質問しながら，新生児モデル人形を用いて育児技術の説明を行った。

ｂ．モデル人形を使用した育児疑似体験

赤ちゃんの《泣き》に対する育児技術【授乳（瓶哺乳)】,【オムツ交換】,【排気】,【あやし方】と【更衣】を加えた5つの育児疑似体験とした。育児疑似体験には，育児疑似体験モデル人形：育児体感赤ちゃんマイベビー（T-5055，株式会社高研)・マイベビー３（LM-T8020，株式会社高研）を使用した。育児体感赤ちゃんマイベビーは，練習モード（設定プログラム）を選択した。【更衣】の育児疑似体験は，新生児モデル人形を使用した。

まず，グループで１体の育児疑似体験モデル人形を使い，育児疑似体験モデル人形の電源を入れる前に，親しみを感じられるようグループメンバーで育児疑似体験モデル人形に命名させ，電源を入れることとした。その後，約15分の育児疑似体験モデル人形を使った育児疑似体験に加え，新生児モデル人形を使用した【更衣】を行い，合計35分の体験を行った。指導員は，児童へ育児疑似体験モデル人形が表す様子や泣き声が何を表現しているのか質問し，その様子に対する世話や【更衣】についての技術サポートを行った。

ｃ．赤ちゃんと関わるイメージ化の方法

現代の児童たちは，赤ちゃんに接する経験が少なく，実際の赤ちゃんや赤ちゃんの世話など，関わり方をイメージすることが困難であると考えられる。育児疑似体験の経験から，児童自身が赤ちゃんにしてあげたい世話や関わり方を考えてもらう内容とし,「赤ちゃんが自分の家にいたら，どのようなお世話をしたいか」というテーマで絵を描いてもらった。

２．参加児童の背景とプログラム評価に関するアンケート

１）参加児童の背景

育児疑似体験前に，参加児童の準備性を知り，効果的に学習プログラムを進めていくために，参加児童の状況（学年，性別，赤ちゃんの世話経験，赤ちゃんへの感情）についてアンケートを実施した。また，学習による児童の赤ちゃんへの感情の変化を知るために，育児疑似体験などのプログラム終了後においてもアンケートを実施した。

花沢（1992）は，児童期の小学校５～６年生に，対児感情評定尺度を用いた際,「能力的に実施が困難であったことが分かった」と述べている。そのため，アンケート項目は，花沢（1992）の対児感情評定尺度を参考に，独自に作成した。小学校

１年生ならびに４年生の２名に，使用語句のなかで理解できない，あるいは理解し辛い使用語句を指摘してもらい，理解できると考えられた12項目をアンケート項目とした。４検法での回答を求め，それぞれの回答に対し，「非常にその通り（４点）」～「そんなことはない（１点）」とした。分析方法は，SPSS Statistics 22.0にて単純集計およびt検定を行った。実施の際は，各グループに指導員２名が付き，説明や質問への対応を行った。

２）プログラム評価に関するアンケート

A大学男女共同参画推進室は，きっずサマースクール開催各日のプログラム終了後にアンケートを行っている。「今日の勉強は，楽しく出来ましたか」,「今日の勉強は，わかりやすかったですか」,「またやってみたいなと思いましたか」の３項目を「とてもそう思う」～「全然そう思わない」の４検法で回答を求め，また感想を自由に記載してもらった。

３）倫理的配慮

きっずサマースクール開催前に配布されるプログラム内容や注意事項に関するしおりにおいて，利用者アンケートの実施説明が保護者に行われている。本プログラム実施においては，参加児童にアンケートの意味と使用について口頭で説明を行った。また，内容や写真の掲載は，A大学男女共同参画推進室および絵提供児童の保護者より同意を得ている。

Ⅲ．結果

１．参加児童の状況

参加児童は16名であり，学年および性別は表２の通りである。また，赤ちゃんの世話経験は，経験あり４名，経験なし12名であった。

赤ちゃんの《泣き》と育児技術の説明では，赤ちゃんの《泣き》５種類の様子と泣き声で赤ちゃんが何を表現しているのか，またそれに対する世話が何かという質問に対し，「この泣き方は，お腹空いているのかな」など活発に答える児童がいた。また，赤ちゃんの世話経験のある児童は，自分の経験を語ってくれる場面もあった。

育児疑似体験では，育児疑似体験モデル人形への命名に戸惑う様子があったが，育児疑似体験モデル人形が泣く際は，「この泣き方は，あの習った泣き方のなかのどれかな」と赤ちゃんの《泣き》についての学習内容を活用する発言が多く聞かれた。【更衣】では，指導員よりサポートを受けながら，関節を把持し，積極的に実施できていた。育児疑似体験終了後は，「さっきの泣き方５つ，覚えるために書いて帰ろう」という児童もいた。

また，赤ちゃんと関わるイメージ化における描写では，赤ちゃんが傍で寝ている様子，赤ちゃんを抱っこする様子や撫でる様子を描き，全員が赤ちゃんと関わるイメージとして肯定的な様子を描いていた（写真１）。描きながら，「一緒に遊んであげよう」,「一緒に眠りたい」という発言など聞くことができた。

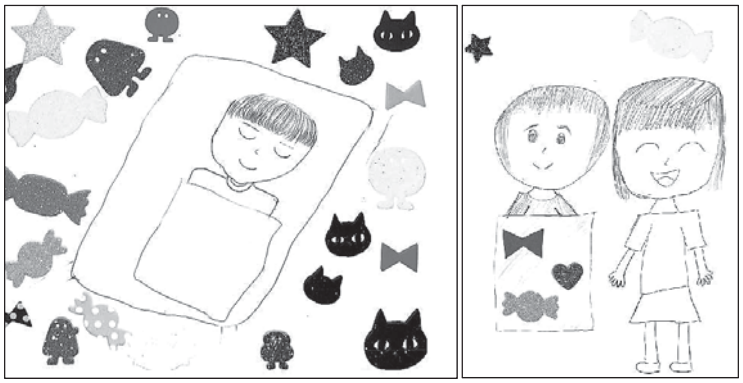

写真１　参加児童の描写（２例）

表２　参加児童の属性（n＝16名）

学年	男児	女児	合計
１年生	1	1	2
２年生	3	2	5
３年生	2	2	4
４年生	0	2	2
５年生	2	0	2
６年生	0	1	1
合計	8	8	16

2．参加児童の赤ちゃんへの感情

育児疑似体験前後の赤ちゃんへの感情の得点平均および標準偏差，育児疑似体験前後での赤ちゃんへの感情の得点のt検定結果は，表３の通りである。接近感情のうち有意に平均得点が上昇した項目は，『うれしい』，『うつくしい』であった。また，有意差はないが平均得点が上昇した項目は，『たのしい』，『やさしい』，『あかるい』であり，

表３　プログラム学習前後の参加児童の赤ちゃんへの感情

項目		平均±標準偏差 学習および体験前		学習および体験後	p 値
接近感情	あたたかい	2.81±0.75	＞	2.69±1.08	.432
	うれしい	2.50±1.03	＜	2.94±1.00	.004 **
	たのしい	2.13±0.81	＜	2.31±1.20	.270
	やさしい	2.56±0.89	＜	2.63±1.15	.669
	あかるい	2.88±1.02	＜	2.94±0.93	.580
	うつくしい	1.94±1.00	＜	2.31±1.14	.009 **
回避感情	よわよわしい	2.25±0.77	＜	2.43±1.09	.270
	やかましい	2.06±0.85	＜	2.25±1.29	.333
	むずかしい	2.37±1.15	＜	2.88±1.15	.006 **
	てれくさい	1.50±1.03	＜	1.94±1.24	.029 *
	めんどうくさい	1.94±1.18	＞	1.75±0.93	.083
	こわい	1.50±1.10	＞	1.25±0.77	.164

*p＜0.05　**p＜0.01　t 検定

表４　参加児童からの評価

	とても そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	全然 そう思わない
楽しく出来ましたか	9	7	0	0
分かりやすかったですか	14	2	0	0
またやってみたいなと思いましたか	9	6	1	0

表５　参加児童の感想（自由記載）

分かりやすく教えてくれてありがとうございました。
赤ちゃんは、泣き方で表してすごいと思った。
色々な赤ちゃんの泣き声があり、それぞれ意味があるのを初めて知った。
5つの泣き方を覚えておいて、将来役に立つようにしたい。
赤ちゃんの抱っこの仕方が分かった。
思ったより赤ちゃんが重く、あやす難しさが分かった。
オムツ交換は難しかったけど、きちんとできた。
親戚に赤ちゃんが生まれるので、お手伝いをしたい。
これからもいっぱい妹のお世話をしたい。
赤ちゃんに何かしてあげたいと思った。
とても楽しかった。またやってみたい。

下降した項目は『あたたかい』であった。回避感情のうち有意に平均得点が上昇した項目は，『むずかしい』，『てれくさい』であった。また，有意差はないが平均得点が上昇した項目は『よわよわしい』，『やかましい』であり，下降した項目は『めんどうくさい』，『こわい』であった。

3．参加児童からの評価

4検法による評価3項目については，表4の通りである。「今日の勉強は，楽しく出来ましたか」，「今日の勉強は，わかりやすかったですか」では，全員が「とてもそう思う」または「少しそう思う」という回答を得た。「またやってみたいなと思いましたか」については，1名が「あまりそう思わない」と回答したが，15名からは「とてもそう思う」または「少しそう思う」という回答を得た。また，自由記載による感想は，表5の通りである。

Ⅳ．考察および今後の展開

現在，次世代育成施策における「乳幼児と触れ合う機会の拡大」として，主に小学校高学年以上を対象にした実際の赤ちゃんとの「ふれあい体験」の開催が増えている。児童の赤ちゃんに触れる抵抗感を軽減させ，赤ちゃんを身近な存在としてイメージ化を図り，自分より幼い他者と触れ合える素地を養っていくことは，他者への関心や共感する能力を高め，児童自ら赤ちゃんと関わっていく機会を増やす。

1．赤ちゃんの《泣き》と育児技術

赤ちゃんに接した経験が少ない児童では，泣いている赤ちゃんへ触れることに抵抗があると考え，赤ちゃんの《泣き》の理解とそれ対する育児疑似体験を主な内容とした。プログラム終了後，接近感情のうち有意差はなかったが『あたたかい』のみ平均得点の下降がみられ，5項目は平均得点の上昇がみられた。他方，回避感情は，赤ちゃんの様子を表す『よわよわしい』，児の《泣き》と関連する項目である『やかましい』は，有意な差はないがやや平均得点が上昇し，育児技術に関連する項目として『むずかしい』が有意に上昇していた。肯定的な感情が高まる一方で，赤ちゃんの様子や児の《泣き》，育児技術に関連するような項目において否定的な気持ちも高まっていた。また実際に，児童の感想では，「楽しかった」，「またやってみたい」，「将来役に立つようにしたい」など肯定的な感情に対して，「赤ちゃんの重さ」を体験し，【おむつ交換】や【あやし方】の難しさを感じていた。

佐々木ら（2010）は，継続接触体験のなかで乳幼児の泣き場面に接し対応するという経験の積み重ねが，乳児の泣きに対する敏感性や共感性，対処する能力を高めたと述べている。児童の反応として，児の《泣き》は『やかましい』ことであり，回避感情として捉える一方で，「この泣き方は，あの泣き方のなかのどれかな」と学習内容を活かして，赤ちゃんの《泣き》による表現を理解し，赤ちゃんに寄り添う場面があった。《泣き》の学習において児の特性を理解したことで，育児疑似体験モデル人形の《泣き》に対し敏感に反応し，自ら赤ちゃんへの対応方法を考える機会となっていた。児童たちは，育児疑似体験を行ったことで，赤ちゃんの気持ちを察すること，またその育児技術の難しさを実感していた。

2．赤ちゃんと関わるイメージ化

赤ちゃんへの接近感情のうち5項目は平均得点の上昇がみられ，特に『うれしい』，『うつくしい』の2項目は有意に上昇しており，赤ちゃんに対する肯定的な感情を上昇させていた。児童の感想のなかに「赤ちゃんに何かしてあげたい」，「赤ちゃんは，泣き方で表してすごいと思った」と他者を思いやる感情や赤ちゃんの特性を表現しており，描写では自らが赤ちゃんの世話をするイメージ化ができていた。『むずかしい』と感じる一方で，直接的な経験に基づいた論理的な思考が子どもに備わってくる大切な時期，すなわち，具体的操作期にある児童なりに，赤ちゃんの特性を考えながら世話を経験できたことで，赤ちゃんと関わることを前向きに捉えていた。低学年や赤ちゃんに接した経験が少ない小学校高学年の参加児童にとって，今回の育児疑似体験は赤ちゃんと触れ合う抵

抗感を軽減させ，自らが赤ちゃんに関わるイメージ化ができたと思われる。このように，《泣き》の理解と育児疑似体験モデル人形を使用した本プログラムは，児童期において自分より幼い他者と触れ合える素地を養う導入としての学習方法となると思われる。

3．今後の展開

今回の育児疑似体験は，低学年も参加しており，育児疑似体験モデル人形を使用したプログラムとした。寺村ら（2007）の小学校高学年を対象にした「赤ちゃんふれあい体験学習」の取組みにおいて「こんなに小さな手が私たちみたいに大きくなるのにびっくりした」，「将来こんな子どもがいたらいいなと思った」と参加児童が感想を持っている。本プログラムでは，有意差はないが接近感情のうち『あたたかい』のみ平均得点の下降が見られていた。実際の児と触れ合う機会を持つことは，生命の温かさを感じ，生命の存在，大切さや自分自身の成長を感じられる良い経験であり，思いやりの心や他者と協同する態度を養う機会となる。今後，将来を担う次世代教育として，自分より幼い他者と触れ合える素地に加え，生命の大切さを感じ，思いやりの心や他者と協同する態度を養い，親となり子育てをしていく準備のための積み重ねられる経験学習プログラム作りを展開していきたい。

また，本プログラムの企画・運営は，A大学看護学科教員およびA大学男女共同参画推進室の室員のみで行ったが，TAや学生ボランティアとして，A大学教育文化学部や大学院看護学研究科の学生に指導員として参加してもらった。児童との関わりは，学生の経験となり，地域を支えていく教育者・医療者としての動機づけとなり得る。今回が初めての開催であり，特に育児疑似体験では，学生ボランティア自身も育児技術において戸惑うことがあった。今後は，参加児童にとって効果的な学習となるよう，学生ボランティアとも協働し企画・運営を行っていくなかで，地域における次世代の人材育成も目指したい。

Ⅴ．おわりに

今年度，初めて育児疑似体験プログラムの企画・運営を行ったが，参加児童からは思いのほか良い評価を得ることができた。しかし，きっずサマースクールの対象は，A大学教職員ならびに学生の子（小学生）であり，毎年参加している児童も多数いる。今後も，次世代育成を目指し，本プログラムを発展させるために，内容・方法を検討していきたい。また，A大学のみならず，学童期から思春期における生命の大切さの理解や親性の涵養が出来る継続した場づくりを広く地域において行っていきたい。

文献

麻生紀子，岩立志津夫（2016年）：乳児に対する母親のタッチの関連要因－初産婦と経産婦の比較－，小児保健研究，75(2)，187-195

片山美香，清水凡生，榊本美恵子（2003年）：小学生を対象とした赤ちゃんとのふれあい体験学習の試み，思春期学，21(1)，113-125

佐々木綾子，小坂浩隆，末原紀美代，他（2010年）：親性育成のための基礎研究(1)－青年期男女における乳幼児との継続接触体験の心理・生理・脳科学的指標による評価－，母性衛生，51(2)，290-300

田中和子（2007年）：育児適応に影響を与える要因の検討，母性衛生，47(4)，554-562

寺村ゆかの，川谷和子，伊藤篤（2007年）：地域連携にもとづく次世代育成プロジェクト「赤ちゃんふれあい体験学習」の短期的効果に関する研究，保健の科学，49(1)，71-77

野間口千香穂，荒武亜紀，兵頭慶子，他（2016年）：子どもの生活と子育てにおける世代間交流の推進プロジェクト～地域に根差して引き継がれる育児の工夫や知恵の伝承の実態～（平成27年度みやざき地域志向教育研究費：研究成果），

http: //www. miyazaki-u. ac. jp/miyazaki-u/area/keihi/keihi-27［2016-10-15現在］

花沢成一（1992年）：母性心理学，医学書院

藤原郁，岩間薫，日景真由美（2000年）：小学生の育児体験と胎児感情に関する一考察－赤ちゃんとのふれあい体験学習を効果的に実施するために－，秋田桂城短期大学紀要，9，47-57

船橋健康福祉局子育て支援部地域子育て支援課・児童ホーム（2008年）：平成27年度中学生と赤ちゃんふれあい事業 実施報告書，3-49

Priscilla Dunstan（2006 年）：Dunstan Baby Language Program【DVD】，Globalbaby